



文化財を守り活かす市民力

―田熊石畑遺跡の取り組み―

『新修宗像市史』 原始・古代部会から

発見から調査へ

田熊石畑遺跡は、宗像市役所から南へ徒歩10分ほどの市街地に位置する弥生時代中期(紀元前2世紀頃)を中心に営まれた集落と墓からなる遺跡です。この遺跡の発見は古く、昭和8年(1933)に遡ります。

福岡県立宗像高等学校に赴任中の教諭田中幸夫氏が校庭の拡張工事の際に発見、宗像市初の発掘調査が行われました。戦後に女学校が移転した後は長らく空地でしたが、平成19年(2007)、この土地に民間の開発事業計画が持ち上がり、平成20年(2008)4月から全面の発掘調査が開始される運びとなったのです。

調査から1か月余り経過した6月初め、弥生時代中期前半頃の木棺墓群から武器形青銅器が合計15点出土し、関係者を驚かせました。武器形青銅器は、当時の有力者の権威や権力を示す財物とされ、ごく限ら

れた有力者の墓に副葬される貴重品です。宗像地域の古代史においてこの意義はきわめて大きく、マスコミにもたびたび取り上げられることになりました。

保存・整備・活用

この発見によって平成20年12月には、むなカタ歴史を学ぼう会や宗像歴史観光ボランティアの会のメンバーなど、重要な遺跡を未来に残したい有志が新たな会を立ち上げ、遺跡の重要性を広く市民に知らせながら保存を働きかける運動を行いました。その甲斐あって市は遺跡の全面保存を決定し、田熊石畑遺跡は平成22年2月22日、国史跡に指定され地域の宝は守られました。

市は遺跡の保存を決定するとすぐさま整備事業に取り掛かりました。今日において地域の歴史文化遺産を守り、伝え、活かすには市民の力が欠かせません。そこで、平成22年度に整備基本計画を策定する際、

市民ワークショップを開催し、市民の意見を反映させた史跡整備を目指すことにしました。この市民ワークショップメンバーが核となって平成27年3月に田熊石畑遺跡村づくりの会(以下、村づくりの会)を結成し、現在歴史公園のサポート団体として活動しています。

整備工事を平成24年度から27年度までの4年間で実施するなか、平成25年2月には歴史公園をより身近に感じてもらうために愛称募集を行い「いせきんぐ宗像」に決定しました。平成30年度のいせきんぐ宗像の来園者は約2万8千人を数え、各種イベントや見学、日々の健康づくりに利用されています。また、歴史公園に接する道路は地元小学校の通学路であることから、子どもの見守りや宿題指導のほか、歴史体験学習などいせきんぐ宗像らしい特徴を持った寺子屋を開設し、学生ボランティアも参加して和気あいあいとした雰囲気です。さらに、菜花園と名付けた約2千㎡の花園兼農園では赤米など歴史的作物を栽培しており、毎年11月には収穫祭として秋祭りを開催しています。

村づくりの会が詰める案内管理棟には村びとから多彩な活用アイデアが日々持ち込まれており、子ど

ものためと言いつつも大人が一番楽しんでいるようです。このような取り組みが成功している背景には、宗像市が1990年代末頃から取り組んでいる「市民協働によるまちづくり」がその背景にあるからと考えています。

(原始・古代部会 白木英敏)



上；いせきんぐ宗像整備後全景(東から)

下；田熊石畑遺跡村づくりの会

